

國學院大學学術情報リポジトリ

発題3 共通教育「基礎日本語」で育てるもの

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 成田, 信子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001325

〔発題3〕

共通教育「基礎日本語」で育てるもの

國學院大學人間開発学部初等教育学科教授 成田 信子

國學院大學人間開発学部のカリキュラム

人間開発学部の成田と申します。私は、「共通教育「基礎日本語」で育てるもの」というタイトルでお話をします。学部共同研究で国語力について二年間研究して参りました。発端は、入学後にする診断テスト、國學院大學全体のテストがあるので、人間開発学部が新しく出来て二年目だったでしょうか、国語の点数が伸びていないということがありました。大学生にとっての「国語の力」とはどういうものだろうと考えたのが一番のきっかけです。実は私の専門は初等の国語教育なのですが、小・中・高等学校と育ってきて、それが大学生でどうなっ



ていくのだろうかということやちゃんと考えてみよう、そう思っ研究をスタートしました。

私どもの学部のカリキュラムですが、大学生の国語力育成・発揚の場としてはまず、一・二年次に「基礎日本語」という科目があります。今日これを中心にお話し

します。もう一つ、初年次導入科目として「導入基礎演習」があります。これは共通シラバスで、書いてまとめる、或いは発表する、文献を読むというようなことがかなりはいつています。

専門科目は、先に三年次と四年次の話をしますと、演習と卒業論文を必修にしています。三年後期にゼミに所属するので、そこでは自分の専門分野の文献を読んだり、或いは実験・観察をしたり、アンケートやインタビューをしたりということ、非常に国語力が関係してきます。そして、卒業論文は二万字以上で書きます。文章を書く力が求められます。

汎用的能力と国語力

私たちの学部共同研究は、「国語力」と呼んでスタートしました。小・中学校、或いは一番のターゲットとなる高等学校の学習指導要領の改訂で議論になっているのは「汎用的能力」で、これは広く用いることの出来る能力です。これまで提言されてきた様々な資質・能力、キー・コンピテンシー、或いは学士力、社会人基礎力、つまり、生きて働く力として、生きていくためにどういう力が必要かと、そういうふう議論されている流れ

が大きいのと思います。それで、「汎用的能力と言語の力」というふうに言ってもいいかと思うのですが、汎用的能力の立場から言語の力を整理したものが、今の主流だと言っても良い「PIASA型読解力」がそうだと思います。つまり、テキストの解釈をして、自分がどういうふうに参加して、それがどう役に立っているかということを考えていくという能力です。

ここで「アカデミック・ジャパニーズ」という考え方を紹介したいのですが、もともとこの考え方は留学生のための日本語教育の考え方、つまり日本語で発表したり、日本語で討論したりという、そういうところからスタートしています。それが日本語教育学会の力もありまして、アカデミックな場で必要な日本語力として日本人の学生にもどういう力が必要かという方向で議論がされるようになりました。そこでは日本語を相対的に捉える、或いはインタラクティブに相互作用的に学んでいく、異文化間コミュニケーションを踏まえるというような形で日本語を教える人の特長をおさえているのですが、これは、日本語を一つの言語としてどんな特徴があるかというふうに見ていくということだと思っております。

それに対して「国語力」という言い方ですが、これは文化審議会の答申「これからの時代に求められる「国語力」」（平成十六年二月三日）にモデル図という形で整理されています。答申は、その「根幹にかかわる部分」として、生涯を通じて形成されていく教養とか、価値観とか、感性とか、そういうものを置き、その上に「考える力、感じる力、想像する力、表す力の基盤となる国語の知識」ということも言っているのです。個人にとっての国語、感性、情緒、知的活動の基盤である国語と

社会全体にとっての国語両者を位置づけ、ここで「文化の基盤」「文化そのもの」という言い方もしています。そうすると、先ほどの汎用的能力、言語の一つとして使っていく力ということと重なりながらも、もう少し他のことをこの文化審査申は言っていて、この流れが「伝統的な言語文化」を一つの事項として加えた現在の学習指導要領まで来ているというふうに思っています。次の改訂でどうなるかは分かりませんが。

私たちの共同研究では、PIASA型読解力の考え方もあさえ、国語力をどう捉えたら良いかという話をしました。共同研究の報告書（『国語力の育成に関する基礎的研究 研究成果報告書』）において、文化の基盤、或いは文化そのものとしての国語は、PIASAや社会人基礎力には盛り込まれていないものと考えて良いのではないかと、つまり、両者が重なりながらも違うものを持っているということ、両者を止揚する方向性というのはいだらうかと藤田大誠氏は指摘しています。私も同じ報告書で述べましたが、個人にとっての国語における感性、情緒の基盤ということ、社会全体にとっての国語における文化の基盤との関わりがとても大事だと思っております、私は社会全体にとって国語が、何か実態として存在するだけではないと考えています。

例えば「雨がびりびり降っている」。びりびりとは皆さん言わないかもしれないですね。私は祖母が関西の人だったので、そういうふうにするのですが、雨がどんなふう降っているかをどういうふうにするかということは、個人の感性や情緒の問題であり、そしてそれがどうやって継承されていくかという問題だと思っております。そのことは言語の運用能力と、そういった

言葉は文化そのものだということの関わりをちゃんと見ていると、私は表層だけの、例えば小学校でも時々ありますが、上手に発表出来ましたと言って発表の仕方だけをトレーニングするような在り方にはちょっと懐疑的なのです。

「基礎日本語」における実践から

学部共同研究では、國學院でできる国語力とは何だろうかという話もしました。本学では共通教育という言い方が来年から始まるようで、今は大きな改革期になっているのですが、そこで「基礎日本語」という科目は残る。私も一つ担当しているのですが、そこでの日本語力なり国語力の概念をどう捉えるかが非常に大事なところだと思っています。

「基礎日本語」では何をやっているかということ、授業計画として、前半の二回から四回まで三回分、課題文要約と自分の考えを書くということを四百字、四百字、八百字でやっています。私はコンテンツなしのコンピテンシー育成はあり得ないと思っています。つまり、コンテンツは何かということですね。コンテンツと文化そのものをそのままつないではいけないと思いますが、考えたり書いたりする内容という意味で言っているのです。内容を無視した小論文の指導とは何だろうと時々思うことがあります。

何をやったかを三つ見ていただきたいのです。一つは朝日新聞のコラムのようなものですが、「ふれる」と「さわる」。外気に触れる。読者に触れる。これは、対象が人間に限らず、物でも抽象概念でも広く使える。でも、触るは少なくとも接触する

主体が人間かせいぜい動物。触れるというのが、電車に「触れる」よりも「触る」の方が危険が少ないというのは意思を伴っているからだというような、そういう論旨が展開されています。学生が出した事例は、「気に障る」とか「痢に障る」というのもあるではないか。それは、いずれも目に見えないから、筆者が言っているのはちょっと違うよね、と。他にもたくさん例が出てきたのですが、記事の事例とは異なるというようにここを出しながら、でももうちょっと掘っていくと、実は漢字が違っているとか、語源の方へ行く。その場で調べられる範囲で書いたのですが、こういうことで、昔はどういうときに使っていたのかというような、さっき古典の話もあったのですが、そういうふうに考えを発展させることが出来るテーマです。

それから、有名なコラムニストの天野祐吉が書いた「サブリミナルの効用」。サブリミナルとは恐ろしい、無意識に働き掛けて忘れられなくなるという効果のことです。でも、これは良い方で書いてあって、車のCMが日本の田園風景を走ると、そっちが印象付けられて、それはなかなか良いのではないかという。でも、それは作り手の意識によるという論旨で書いていて、風土や人物について何か自分で考えてみる。私たちの世代だと刷り込まれて宗教指導者の顔がぱつと出たりという怖さも思いますが、学生は知りませんでした。学生は無意識に出てくる音楽のことなどを言っていました。良いものと嫌なもの、それを送り手が決めているのだということ。内容、コンテンツが学生の思考を引き出します。

最後に取り上げた「記者有論」というコラムでは朝日新聞の記者が、相模原市の障害者施設で殺傷事件があった時に、神奈

学生は何を学んでいるか

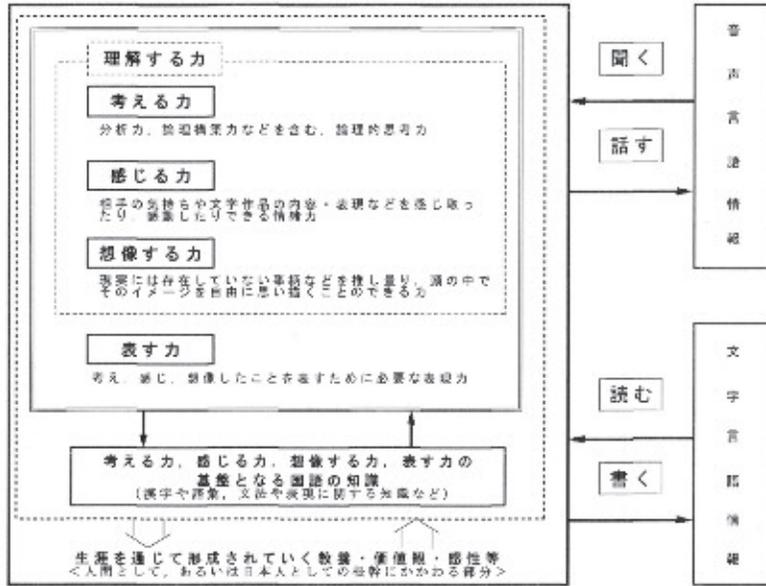
川県警が被害者を匿名で発表していたから、なかなか被害者の所へは行けなくて、どうやって行ったか、そして、自分はこういうふうにしてその人の人生に触れたかということを書いていきます。同僚が匿名による取材の困難さを「Twitter」で発信しあつたら、そんなことをしなくても事件の重大さは伝わるという意見が一方で挙がったとも書かれています。八百字なので四百字よりも少し手間をかけて、幾つかの方法を提示して書かせていただきました。まずこれを読んで自分でテーマを考える。例えば匿名か実名かというテーマの立て方も出来るし、記者の報道の在り方はどうあつたらいいかというふうな、もう少し大きいところでも出来るし、或いは最後に差別ということが出ていて、そういうことについても考えることが出来ます。自分でテーマを決める。この記者の人はどういう立場を取っているか、自分はそのれについてどういう立場を取っているか、その根拠はどこに取るかというときに、ほかの新聞記事から根拠を取つてもいいことにしました。さきほどの「ふれる」と「さわる」もそうでしたが、学生同士の議論も入れました。学生が自分はこの立場だと話すとはかからたくさんの立場と意見が出てきて、議論するということの大事さを思いました。

コンテンツのことで、自らが背負っている文化を意識し、根拠を問うような、そういうものをやりたいなと私は思います。読むため、書くための方法というのは、皆さんやっていることなので、これは先ほど高校の先生方の話を聞いて、重なりながら、では大学を何をしなければいけないのかと思えました。自分の立場とか意見が大事なのではないかと思えました。

自分の学生は何を学んでいるか、三つの課題文を書いた後に振り返ってもらったのです。学生が書いていたのは書いた内容と学んだことが一体になって出てきました例えば「ふれる」と「さわる」という二つの単語でしたが、ニュアンスで捉えると分かり易く、「触れるな危険」と書かれていた方がより危険性が増して聞こえるなど、日本語の楽しさを実感しました」と書き、内容に触れながら日本語の楽しさを実感したとあります。また最後の課題では、「私は実名を出さない方が良いという意見でしたが、周りの人と話してみると、意外にも実名を出した方が良いという意見が多く、情報交換の場というのもあった方が良いと思った」という感想もありました。うまく説明出来ないですが、このメタ学びともいうべき、自分のやったことについて、例えばこういうことが出来るようになった、これは難しいとか、これは苦手だというような振り返りを学生がしているというところも出てきています。

それから、文章を書くときに何が大学生にとってとても大事かというのと、去年共同研究の報告書で渡邊雅俊氏が指摘していたのですが、その文章は何のために誰に宛てて書いて、どうやって表していくのか。相模原事件の文章でいえば、授業で共有していない人に分かるように書くとはどういうふうに書くことなのかという書くことそのものに関する方略の問題があります。途中で投げ掛けをしないと、学生はみんな議論しているから「分かった」という前提で、自分はこの立場からだと言き始めてしまうような学生がいたことです。それも勉強になりました。

<参考> これからの時代に求められる「国語力」の構造（モデル図）



そういうところで汎用的な言語能力とは何かということも考えなければいけないのですが、それに加えて、「文化創造」と言うところですが、切り離せないと思うのです。そういうものを含み込んだ形で考えていきたいというふうに思いました。以上です。ありがとうございました。

文化審議会答申『これからの時代に求められる「国語力」』（平成16年2月3日）

